

オッカム『論理学大全』(III-1, c. 5)における様相概念について

阿南 貴之

1 はじめに

アリストテレスが分析論前書で扱った四つの様相、「必然」「非必然」「可能」「不可能」に加えて、「真(verum)」「偽(falsum)」「知られる(scitum)」「発話される(prolatum)」「書かれる(scriptum)」「精神のうちに懐抱する(conceptum)」「信じられる(creditum)」「思われる(opinatum)」「疑われる(dubitatum)」などの様相があるとオッカムは述べている。「本来的には「命題の様相」は、いわば命題そのものに真に述語づけられうるもの¹」であり、ある命題が必然であり、或る命題が不可能であったりすると同様に或る命題は真であり、ある命題は知られるということが命題に真に述語付けられうること、そして、アリストテレスが他の様相を否定しなかったこと、また「必然」や「可能」について述べられたことが「真」や「偽」、「知られる」といった様相に当てはめることが可能であるため、アリストテレスは簡潔さのために、初めにあげた4つ以外の様相について論じていないとオッカムは述べている²。オッカムが4つの真理(alethic)様相の他に加えた「知られる」などが様相として扱われるようになったのは、Boh³によれば14世紀頃である。オッカムは論理学においてこうした様相を取り上げ始めた初期の人物の一人にあたる。オッカムが*Summa Logicae*, III-1, c. 5の「知られる」を様相とした命題について述べている箇所をもとに、オッカムが*Summa Logicae*においてどのように様相命題の解釈を理解していたかをこの論文は追う。なお、本論文においては*Summa Logicae*の日本語訳として渋谷克美、『オッカム『大論理学』註解』を用いる。

2 *Summa Logicae* III-1, c. 5 における様相命題の真理条件

オッカムは*Summa Logicae* III-1, c. 5において認識様相の命題についての興味深い議論を展開している。

Sit primum istud: sit ita quod ista nomina sint synonyma simpliciter ‘gladius’ et ‘ensis’, et tamen quod Sortes hoc ignoret, sed sciat significationem, istius nominis ‘gladius’ et nesciat quid significet hoc nomen ‘ensis’. Tunc haec est vera ‘ensis scitur a Sorte esse unum genus armorum’ vel ‘ensis scitur a Sorte esse acutus’ vel ‘ensis scitur a Sorte esse ferrum’, quia hoc praedicatum vere competit et vere praedicatur de pronomine demonstrante illud pro quo subiectum supponit. Igitur ista propositio est vera, et tamen nulla istarum, propositionum est scita a Sorte ‘ensis est unum genus armorum’, ‘ensis est acutus’, ‘ensis est ferrum’. (Ockham, *Summa Logicae*, III-1, c. 5, pp. 372–373)

第一の例は次のものである。‘gladius’ と ‘ensis’ は無条件に剣を意味する同義語であるが、ソクラテスはそのことを知らず、‘gladius’ という名前の意味を知っているが、‘ensis’ という名前はが何を意味するかを知らないとしよう。この場合、「ensis はソクラテスによって武器の一つの種類であると知られている」、「ensis はソクラテスによって鋭利であると知られている」、「ensis はソクラテスによって鉄製であると知られている」という命題は真である。なぜなら、

¹Ockham, *Summa Logicae*, II, c. 1, pp. 242–243, ll. 46–48; 渋谷克美, 『オッカム『大論理学』註解 III』, 第II部第1章, p. 7.

²Ockham, *Summa Logicae*, II, c. 1, pp. 242–243.

³Ivan Boh, *Epistemic Logic in the Later Middle Ages*, p. XIII.

主語が代示するところのものを指示する代名詞に、述語が真に適合し、真に述語づけられるからである。しかし「ensis は武器の一つの種類である」「ensis は鋭利である」「ensis は鉄製である」という命題はいずれもソクラテスによって知られていない。(渋谷克美, 『オッカム『大論理学』註解 IV』, pp. 19-20)

「剣」を意味するという点で一致する 'gladius' と 'ensis' について、ソクラテスはこれら二つの語の意味が一致することを知らない、またソクラテスは 'gladius' という名称は知っているが 'ensis' という名称は知らないという二つの仮定のもとでオッカムは論を進める。このとき、「ensis は武器の一つの種類である」という命題はソクラテスによって知られていない。しかし、「ensis はソクラテスによって武器の一つの種類であると知られている (ensis scitur a Sorte esse unum genus armorum)」という命題は、この命題の主語 'ensis' が代示するものを指示する代名詞について述語である「武器の一つの種類である」を述語付けて形成した命題「これは武器の一つの種類である」が真であるため、この命題は真であるといわれる。オッカムは様相命題の区分と、区分に応じた様相命題が真理条件について次のように述べている。

..... Et est primo sciendum quod aliquando dicitur propositio de modo, quia accipitur dictum propositionis cum tali modo. Sicut patet de istis 'omnem hominem esse animal est necessarium',....., 'Sortem currere est ignotum', et sic de aliis. Aliqua autem propositio dicitur modalis, in qua ponitur modus sine tali dicto propositionis. (Ockham, *Summa Logicae*, II, c. 9, p. 273, ll. 4-11)

..... 第一に、次のことが知られるべきである。すなわち或る場合には、命題の言表句 (dictum) が様相とともに解されるが故に、命題は様相命題と呼ばれる。このことは例えば、「全ての人間が動物であることは、必然である」.....「ソクラテスが走ることは、知られていない」といった命題において明らかであり、その他の命題に関しても同様である。また或る場合には、このような命題の言表句なしに様相が置かれている命題が、様相命題と呼ばれる。(渋谷克美, 『オッカム『大論理学』註解 III』, p. 40)

様相命題はまず、言表句の有無によって区分される。言表句とは次の引用箇所述べられるように、文法上は不定詞句の形をとる命題の部分である。

Propositio modalis primo modo dicta semper est distinguenda secundum compositionem et divisionem. In sensu compositionis semper denotatur quod talis modus verificetur de propositione illius dicti, sicut per istam 'omnem hominem esse animal est necessarium' denotatur quod iste modus 'necessarium' verificetur de ista propositione 'omnis homo est animal', cuius dictum est hoc quod dicitur 'omnem hominem esse animal'; quia 'dictum propositionis' dicitur quando termini propositionis accipiuntur in accusativo casu et verbum in infinitivo modo. (Ockham, *Summa Logicae*, II, c. 9, p. 273, ll. 12-19)

更に第一に仕方で行われた様相命題は常に、結合と分離に従って区別されなくてはならぬ。結合された意味においては (in sensu compositionis) 常に、このような様相命題によって、様相が言表句である命題に真に述語づけられるということが意味されている。例えば、「全ての人間が動物であることは、必然である」('omnem hominem esse animal est necessarium') という命題によって、様相「必然」が「全ての人間は動物である」という命題に真に述語づけられるということが意味されているのである。ここでの様相命題の言表句とは、'omnem hominem esse animal'(全ての人が動物であること) と言われているものである。なぜなら、「命題の言表句」(dictum propositionis) と言われるものは、命題の名辞が対格で、動詞(繫辞)が不定法で用いられている場合だからである。(渋谷克美, 『オッカム『大論理学』註解 III』, p. 40)

言表句を伴う様相命題は結合された意味においては、言表句が代示する命題に「必然的」や「真」、
「知られる」が述語付けられる。「全ての人間が動物であることは、必然である」という命題におい
ては「全ての人間が動物である」という命題が必然的であると言われる。

Sed sensus divisionis talis propositionis semper aequipollet propositioni acceptae cum modo, sine
tali dicto; sicut ista 'omnem hominem esse animal est necessarium' in sensu divisionis aequipollet
isti 'omnis homo de necessitate vel necessario est animal'. Similiter ista in sensu divisionis 'Sortem
esse animal est scitum' aequipollet isti 'Sortes scitur esse animal'. Et sic de aliis. (Ockham, *Summa
Logicae*, II, c. 9, p. 273, ll. 19-25)

他方分離された意味において解された様相命題 (sensus divisionis talis propositionis) は、そのよ
うな言表句なしに、様相とともに用いられた命題と同義である。例えば「全ての人間が動物であ
ることは、必然である」という命題は、それが分離された意味において解される場合には、「全
ての人間は必然的に動物である」('omnis homo de necessitate vel necessario est animal') と同
義である。同様に、「ソクラテスが動物であることは、知られている」('Sortem esse animal est
scitum') という命題が分離された意味において解される場合には、「ソクラテスは動物である
と知られている」('Sortes scitur esse animal') と同義である。その他の命題に関しても同様であ
る。(渋谷克美, 『オッカム『大論理学』註解 III』, pp. 40-41)

言表句のない様相命題「全ての人間は必然的に動物である (omnis homo de necessitate vel nec-
cessario est animal)」と分離された意味でとられた言表句のある様相命題「全ての人は必然的に動
物である (omnem hominem esse animal est necessarium)」は等しい。結合された意味においては、様
相は言表句が代示する命題全体に作用したが、しかし分離された意味において理解される様相命題
はそれとは異なる。分離された意味において解される様相命題が真であるための条件についてはあ
とでみることにして、次に結合された意味において理解される様相命題が真であるための条件を確
認する。

Ex istis patet quod sufficit scire quid requiritur ad veritatem talium propositionum, sciendo quid
requiritur ad hoc quod aliqua propositio sit necessaria et ad hoc quod sit contingens vel vera vel
impossibilis vel scita vel ignota vel credita, (Ockham, *Summa Logicae*, II, c. 9, p. 275, ll. 67-70)

以上のことから、次のことが明らかである。このような結合された意味において解された命題
が真であるためには何が必要かということを知るには、或る命題が必然であるために何が必要
であるか、或る命題が非必然である、あるいは真である、あるいは不可能である、あるいは知ら
れている、あるいは知られていない、あるいは信じられているためには何が必要であるかを知
ることだけで充分である。(渋谷克美, 『オッカム『大論理学』註解 III』, p. 42)

結合された意味において理解された命題が真であるためには、言表句が代示する命題が必然や
真、あるいは知られている必要がある。このことは後でみるように、分離された意味で理解された
様相命題が真であるために、命題の部分である主語と述語の代示が一致することを求められている
ことと対比的である。「ensis はソクラテスによって武器の一つの種類であると知られている (ensis
scitur a Sorte esse unum genus armorum)」というこの命題は「武器の一つの種類である (esse unum
genus armorum)」という不定法句をもつ命題ではある。しかし、この命題における様相「知られて
いる (scitur)」は言表句の述語ではなく 'ensis' の述語であるため、ここで言われる言表句をもち、結
合された意味で解される様相命題ではない。言表句のない様相命題が真であるためには以下のこと
が必要になるとオッカムは述べている。

Propter quod sciendum quod ad veritatem talium propositionum requiritur quod praedicatum sub
propria forma competat illi pro quo subiectum supponit, vel pronomini demonstranti illud pro quo

subiectum supponit; ita scilicet quod modus expressus in tali propositione vere praedicetur de propositione de inesse, in qua ipsummet praedicatum praedicatur de pronomine demonstrante illud pro quo subiectum supponit.....(Ockham, *Summa Logicae*, II, c. 10, p. 276, ll. 11-16)

それゆえ、次のことが知られなくてはならぬ。このような言表句のない命題が真であるためには、その本来の形式 (sub propria forma) において述語が、主語の代示するところのもの、あるいは主語の代示するところのものを指示している代名詞に適合することが必要とされる。すなわち、述語が、主語の代示するところのものを指示している代名詞に述語づけられることによって形成される実然命 (P') に、元の命題 (P) において言い表わされている様相が真に述語づけられるということが必要とされる (渋谷克美, 『オッカム『大論理学』註解 III』, pp. 43-44)

オッカムは引用箇所が続けて「全ての真なるものは必然的に真である (omne verum de necessitate est verum)」を例にあげて説明している。このような場合には、この命題において主語になっている ‘verum’ が代示するものを指示する代名詞に述語になっている ‘verum’ を述語付けて形成した命題「これは真である (hoc est verum)」「あれは真である (illud est verum)」がすべて必然であれば、「全ての真なるものは必然的に真である」は真である⁴。「ensis はソクラテスによって武器の一つの種類であると知られている」という命題の場合には本来の形式は「ensis は武器の一つの種類である (ensis est unum genus armorum)」であり、この命題について「知られる」という様相が加えられていることになる。したがって、本来の形式での主語 ‘ensis’ が代示するものを指示する代名詞に「武器の一つの種類である」を述語付けた命題「これは武器の一つの種類である」(hic est unum genus armorum) が「ソクラテスによって知られている」のであれば、「ensis はソクラテスによって武器の一つの種類であると知られている」は真であることになる。本来の形式において主語 ensis は個体代示をもつものと思われる⁵。本来の命題「ensis は武器の一つの種類である」では全称記号も特称記号もない普通名辞が主語になっているため不定称命題である⁶。本来の命題の主語である ‘ensis’ は個体代示を行い、不定称命題であるので特称命題と置き換えることができる⁷。したがって本来の命題における主語の代示対象は ‘aliquis ensis’ と同じである。オッカムが「ensis はソクラテスによって武器の一つの種類であると知られている」という命題は真であると述べているのは、代名詞が ‘ensis’ であるモノを指示した命題「これは武器の一つの種類である」がソクラテスによって知られているからだ。ソクラテスは ‘ensis’ という言葉を知らない。そしてまた、‘gladius’ という語については知っているが ‘ensis’ = ‘gladius’ ということをソクラテスは知らない。たしかに、ソクラテスにとっては「これ」が指示しているモノは ‘gladius’ であるが、「これ」である或るモノが武器の一種であることをソクラテスは知っている。したがってもとの命題「ensis はソクラテスによって武器の一つの種類であると知られている」は真だということになる。一方で「ensis は武器の一つの種類である (ensis est unum genus armorum)」という命題はソクラテスによって知られてはいない。とオッカムは述べた。そこから「ensis は武器の一つの種類であることがソクラテスによって知られている (ensem esse unum genus armorum est scitum a sorte)」という言表句がある様相命題を結合された意味で解する場合には命題は偽であるということになる。不定法句で現れた命題は質料代示をもち命題を本来の形の命題を代示する⁸か、あるいは単純代示をもち精神の中の命題を代示する⁹かであるが、いずれにせよ ‘ensis’ という語を知らなければ、その命題を知ることはできない。

⁴Ockham, *Summa Logicae*, II, c. 10, p. 276, ll. 18-24.

⁵この命題の述語は ‘unum genus armorum’ ではあるがここで用いられている ‘genus’ は *Summa Logicae* 第I部第20章で論じられる普遍としての ‘genus’ ではないであろう。なぜなら ‘ensis’ は武器の一種でこそあれ、その下に種として「武器」が置かれる「武器」の類ではないからである。

⁶Ockham, *Summa Logicae*, II, c. 1, p. 244, ll. 86-88.

⁷Ockham, *Summa Logicae*, II, c. 3, p. 255, ll. 5-7.

⁸Ockham, *Summa Logicae*, I, c. 68, p. 208, ll. 1-3.

⁹Ockham, *Summa Logicae*, III-1, c. 20, p. 412, ll. 30-38.

3 様相論理に対するオッカムの貢献に対する評価

本論文では、オッカムが *Summa Logicae*, III-1, c. 5 において提示した内容について、他の箇所での論述を参照しつつ議論を追った。先行研究に基づいて、オッカムの様相論理に対する評価を次のようにまとめられる。(1)14世紀頃には、真理様相に加えてアリストテレスが論じていない様相「知られている」「信じている」「疑われる」等の様相が論理学において注目されるようになっていく。オッカムの *Summa Logicae* はこの潮流の初期に位置する。(2)*Summa Logicae* において様相命題は、言表句を伴う／伴わないとに区分され、言表句を伴う様相命題はさらに結合／分離とに区分され、言表句を伴う結合された意味で解された様相命題と、言表句のない様相命題-言表句を伴い分離された意味で解された様相命題の真理条件は異なる。

(2)のような区分はアリストテレスに由来し、中世ではアベラール以降言及されるようになった¹⁰という歴史的背景が Knuttila によって指摘されている。渋谷は(1)について「これらは、現代の言語哲学において「命題的態度の文脈」(propositional attitude)と呼ばれ議論されているもの」でありオッカムが14世紀においてこうした問題を取り上げていることに注目する価値があると述べている。また(2)結合／分離という区分を、*modalis de dicto*(言表様相)と*modalis de re*(ものについての様相)との区別と解釈し、クワインが指摘したものについての様相における「指示の不透明性」との関連づけて評価している¹¹。

文献

- Ockham, G. de, 1974, *Summa Logicae*, eds. Ph. Boehner, G. Gál et S. Brown, *Opera Philosophica* I. St. Bonaventure, N. Y.: Franciscan Institute.
- Ockham, G. de, 1980, *Ockham's Theory of Propositions, Part II of the Summa Logicae*, Translated by A. J. Freddoso and H. Schuurman, Notre Dame: Notre Dame University Press.
- Ockham, G. de, 1996, *Somme de Logique, Deuxième Partie*, Traduit du latin par Joël Biard, Mauvezin : Édition T.E.R..
- Ockham, G. de, 2003, *Somme de Logique, Troisième Traité, Première et deuxième parties*, Traduction et notes de Joël Biard, Christophe Grellard et Kim Sang Ong-van-Cung, Mauvezin : Édition T.E.R..
- オッカム 2001, 『オッカム『大論理学』註解 III(第II部全37章)』, 渋谷克美(訳註), 東京: 創文社.
- オッカム 2005, 『オッカム『大論理学』註解 IV(第III部-1全68章, 第III部-2全41章)』, 渋谷克美(訳註), 東京: 創文社.
- Boh, I., 2014(1993), *Epistemic Logic in the Later Middle Ages*, N. Y.: Routledge.
- Knuttila, S., 1993, *Modalities in Medieval Philosophy*, London and New York: Routledge.

(あなん たかゆき、広島大学大学院博士課程後期 [哲学])

¹⁰Simo Knuttila, *Modalities in Medieval Philosophy*, pp. 82-88.

¹¹渋谷克美, 『オッカム『大論理学』註解 III』, p. IX, pp. 176-191.

Remarks on Modality in Ockham's *Summa Logicae* III-1, c. 5

ANAN Takayuki

In this paper, we have followed the arguments presented in the examples in Ockham, *Summa Logicae*, III-1, c. 5. The discussion is based on the assumption that there is a person who knows only 'gladius' but not 'ensis', and does not know that 'gladius' and 'ensis' are synonyms. In such a case, Ockham maintains that the modal proposition 'ensis scitur a Sorte esse unum genus armorum' is true. We have traced the argument that this proposition is true, which is based on the distinction between compositio and divisio. The theory of modalities developed by Ockham in *Summa Logicae* has been evaluated to be related to the problems of 'opaqueness of indication' and 'propositional attitude' in the analytic philosophy. Therefore, it is not a waste of time to reconstruct Ockham's discussion.